

やくしによらいぎぞう
薬師如来座像

種 別	小松市指定文化財 彫刻
指定年月日	昭和38年11月3日
所 在 地	粟津町（大王寺）

この像は、もと小松城の鬼門を鎮護していた真言宗の養福院にあったもので、明治維新の際に廃寺となったため、同宗派の大王寺へ移されたものである。

左手に薬壺^{やくこ}をもち、右手はあげて施無畏^{せむい}⁽¹⁾の印相⁽²⁾を作っている。像高は77センチメートルで、ヒノキ材を用いた寄木造^{よせぎづくり}である。像の顔つきは丸みを帯び、目は俯瞰^{ふかん}の相⁽³⁾で、口は一文字に近く、全体的に柔和な表情を見せている。首には三本のしわ

（三道）があり、ふくよかな重量感が表現されている。造仏時には漆塗りであったが、現在は脱落して素材の木目が現れており、彫刀の跡が見て取れる。

作者は不詳だが、京仏師の手によるもので、制作年代は平安時代後期と考えられている。また台座は、後世の文化13年（1816）に修復されたものであることが、^{かまち}框の内側の墨書から分かっている。

- (1) 施無畏：手を上げて手の平を前に向ける印相で、恐れを取り除く意味を表す。
- (2) 印相：仏像の手のポーズや組み方のこと。形によって様々な意味を表す。
- (3) 俯瞰の相：目を薄く開け、下を見下ろす様子のこと。



小松市ホームページ「小松市の文化財」